



コーヒー ブレイク

Coffee Break

## motorcycle バイク事始めのころ

会員 高山 俊吉 &lt;21期&gt;

40歳を少し過ぎたころからバイクにはまった。「バイクの後輪に制動をかける時には、右手、左手、右足、左足のどれを使うか知っているのか」。鑑定人を追及しながら、自らの付け焼き刃知識に冷や汗を流し、これではいかんと一念発起して免許を取ったのがきっかけだった。普通免許を取った修習生のころの仕組みでは、あと数時間だけ教習をよけいに受ければ二輪の免許を貰えたのだったが、当時は目もくれなかったのだ。

バイクに乗れるようになれば、裁判所通いにも使ってみたくなる。しかし、いくら中は背広でも、フルフェイスのヘルメットと革ジャンパーでは、裁判所で出会う知人の弁護士もとまどい、中には一瞬たじろぐ人もいる。法廷が終わりバイク置き場で相手の弁護士にまた会い、先生もバイクですかとあらためて挨拶、じゃあちょっとと裁判所地下の喫茶店によってバイク談義に花を咲かせたこともあった。



夏の北海道一周のツーリングに挑戦した。2000キロを6日間で回るのである。超多忙の中、釧路までフェリーでバイクを送り、自分はぎりぎりまで仕事。それから飛行機で先回りしてバイクの到着を港で迎えるという慌ただしさだ。

すれ違うライダーたちは、たいていお互いに手を挙げ、人差し指と中指でピースサインをするが、中年ライダーの私は何となく恥ずかしい。だが、フルフェイスの革ジャン姿である。すれ違いの瞬間に年格好などわかるわけもない、ただの失敬なやつだ。おずおずと手を挙げ、少し指を広げてみる。さて、人間とは不思議な動物、意外に早く恥は捨てられる。2時間もしないうちに結構堂々と手を挙げている自分に気づいた。

半日も走るとどうだ。両手でピースサインと洒落る者がいると、それも真似をしたくなってくる。両手離しは直線コースでなければできないから、道路の線

形と相手との距離感の見極めが大事。きたぞ、今だ！ だが、こっちが直線ならあっちも直線。ややっ、あいつも両手離しだ！ 武蔵と小次郎ではないが、すれ違いざまの瞬間芸である。こればかりは相手をみてからでは間に合わない。かねての計画の偶然の一致。にやりと笑ったときは、相手方とはもう100メートル以上も離れている。自分の年をそれぞれ完全に忘れたね。



ゲレンデスキーではターン時の内倒内傾の姿勢はほめられないが、小さいアールを高速で曲がるバイクは、ロッシのようにはいなくても車体と自分の体を大きく内側に倒さなければならない。人車一体の快感だ。針葉樹林の木漏れ日を斜めに受けた早朝の走りは解放感に満ち、自然の息吹を体感させられる。いい年をして舞い上がっている自分。バイクが若い人たちのところを奪うのは無理もない。1日の走りでこりこりに凝った首筋を温泉に浸らせながら、私は完全に納得していた。



筆者近影。東京・神宮外苑にて。バイクはCB400SF。